

立	命	館	の	
民	主	主	義	を
考	え	る	会	元教職員

新たな学園創造をめざす大集会と第3回フォーラムの案内  
 【私の意見15】「中途退職した私の思い……田坂 和美  
 (元大学職員)  
 【私の意見14《後編》】立命館の民主化を願って！……  
 辻村 寛(元理工学部教員)  
 賛同者一覧 ●編集後記「どうしようもない懲りない面々」

今こそ  
改革の時！

民主主義の高いうねりが、

慢心と怯懦を砕き、教育の場の本来の姿を呼び戻す!!

—それが改革の原点ともいうべき、私たち共通の願いです—

無責任で懲りない面々を、怒涛の如く追及しましょう！

国民に信用される学園・体制を構築することが求められています！

## ◎立命館の危機を克服し 新たな学園創造をめざす大集会のご案内

日 時：7月15日(火)18:30 開場 19:00 開会～21:30 (閉会予定)

場 所：衣笠キャンパス 以学館1号ホール

主 催：立命館の危機を克服し新たな学園創造をめざす大集会実行委員会  
 実行委員会事務局 (立命館大学教職員組合書記局)

集会の趣旨：(よびかけのチラシを参照して下さい)

7月4日夕刊・5日朝刊で報道された「私大連盟」の不祥事に関わって、理事長はじめ常務会は、今回のことで連盟役員を「交代」したのではない、と在任中のことは“知らん・聞いてない・覚えてない”と無責任な態度(R・UNITAS HOT NEWSも)。挙句の果てには、責任云々いうなら連盟の会長の責任を追及したら、と開き直る始末。立命館の常務理事経験者や秘書室経験者の証言を消せるとでも？こんなことを聞いたら清廉潔白を貫いた故末川総長はじめ歴代総長が嘆き悲しむでしょう。この怒りを集会に結集しましょう！

## ◎第3回「立命館の民主主義を考える」フォーラムのご案内

テーマ：「総長選挙のあり方を問う—法政大学の運動経験に学ぶ」

日 時：7月26日(土)13:30 開場 14:00 開会～16:30 (終了予定)

場 所：衣笠キャンパス 至徳館4階大会議室

主 催：立命館大学教職員組合 共催「立命館の民主主義を考える会」

内 容：(1)法政大学の総長選挙規定をめぐる議論と運動の経過

報告者：長峰 登記夫氏(人間環境学部准教授)、岡野内 正氏(社会学部教授)

(2)立命館「総長選任規定」の問題点

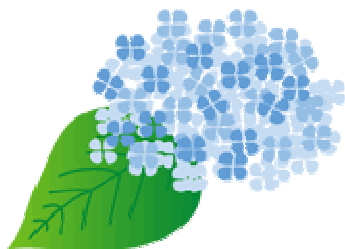
報告者：選考中

(3)討論、 終了後、報告者を囲んで懇親会



ここ数年、日本では、規模の大小、業種を問わず、企業が、時には国民の生命にもかかわる重大な問題をおこし、そのつど経営のトップが記者会見をしては、「申し訳ございませんでした」と頭を下げる、というような事態が頻出している。一様に、誠意というものは感じられず、誰に対して、何を問題として謝っているのか、はっきりしない。

そこへこんどは、なんと、立命館が似たような光景を見せつけた。「私学改革のフロントランナー」と自称し、あたりかまわず突き進んできた立命館が、4月新設の生命科学部特別転籍問題で、助成金25%・15億円削減という処分を受けた。6月20日の記者会見で、理事長は「管理運営が不適切だった」と述べ、理事長、総長以下常任理事の減給処分を発表したそうだが（おかしなことに、前理事長・現相談役についてはその責任はないものとして処分対象外だと）、こんなことで済むような問題か。



岩井忠熊先生が昨年12月のこの「立命館の民主主義を考える会」発足の集会において、「多様な意見を率直に出し合おう」と提起された文書のなかで、立命館が全国私学の中で先駆的な役割をはたした公費助成運動発足当時のことを印象深く述べておられた。辻村寛先生も会ニュース前号で学生と共に夜行バスをしたてて国会請願に行った当時のことを書いておられた。まさに公費助成運動は立命館民主主義の重要な証しのようなものではなかったか。現執行部は、父母、国民の支持を得て全学あげて積み上げてきたこの運動の成果

を踏みにじった。ことは、助成金削減という結果だけの問題ではない。理事会・執行部による大学運営の根本問題がこのような結果をもたらしたということであり、その責任のとりかたは退任の外ない。

### 議論した70年代、本音求める80年代末

私は、1971年秋に採用され、99年3月に退職（選択定年）するまでの27年余りをほとんど図書館、共同研究室・研究所関係の事務職場で過ごした者であるが、70年代、80年代前半ころまでは職場会議（現・業務会議）も職場集會も、議論の場がまだ保障され、よく議論をしたものだと思う。教職員組合と理事会との「業協」、それに学友会、院生協議会が加わった全学協議会は、それぞれのパートがそれぞれの立場から熱の籠もった意見を陳述し、議論を闘わせる場だった（一種、知の格闘技的なところもあったか）。

しかし、だんだん、職場においても率直な議論ができにくくなってきて、87年度の組合のモットーはたしか「ホンネの組合」というようなことだった。私は80年代前半、臨調第3次答申が出されたころから、すでに立命館は時流に乗ろうとしていると感じるようになっていたが、それが80年代後半頃からはしだいに流れに棹さし始め、90年代後半くらいからは強力なエンジンにつけかえて轟進・暴走しはじめたということではないかと思う。「危機意識がない」「立ち止まって考えるべきという意見は間違いだ」と教職員は常に叱咤された。

95年頃から政府の規制緩和推進策によって立命の職場でも「多様な雇用形態」の活用と称して、契約、派遣などの職員がどっと増えた。その前には、「選択定年制」が提起され、組合にもほとんど問題とされることなく制度化されていた。一方ではすでに、予備校、

銀行、他業種からの中途採用が普通のことになり、その中には温情での恣意的に採用されたとされている職員もいると聞く。

また、胸に名札を付けることが義務づけられるなど、職場の雰囲気は「企業風」に変わりつつあった。職場の「民主化・集団化・共同化」といった議論は昔のこととなっていた。現在毎月送られてくる「ユニタース」（広報紙？それとも社内報？）の年何回か大半が採用者の「人物カタログ」ということがある。次々と採用されてくる本採用の人、多様な雇用形態で採用されてくる人、その入れ替わり。中途採用者の中途退職もよくあるときく。これで構成員が心を通わせて働く職場集団がどうしてできるだろうか。加えて、職員にも評価制度が導入されるという。これはもう、職場の人間関係の分断・破壊ではないか。立命館の誇るべき「教職協同」どころか各事務職場の人間的な集団が壊されていってないか。

### これが民主主義か

私は立命館を辞めるとき、ほんとうに「これが民主主義か」と誰よりも現相談役に質したかった。あれだけ、暴力的な言葉使いでもって教職員にあたってきたその彼は、口を開けば「暴力反対」を唱えた。「学生を大事に」と言った。自分のことは見えてなかったのだろうか。裸の王様のように。「強力なリーダー」は、傲慢ぶりも個性と認められるのか。その彼がやっとやめるといふとき、退任慰労金を倍増して1億2千万円を受け取った。私は、いちおう受け取り全額を大学に寄付して自分の名前を残そうとするのかな、それにしても、受け取ること自体容認できないことではあるが、とっていた。ところが、なんと3千万円寄付しただけでそっくり受け取った。雑誌『現代』6月号の記事によれば、1億2千万

は、「休む暇なく頑張ってきたのだから、女房に少し残させてくれ」と。聞くも恥ずかしい陳腐なことば。しかし、ここにも彼の古くて俗っぽい女性観が現れていてなるほどと思う。彼が、立命館内の職員の共働きをあからさまにきらっていたことをも思い起こさせる。教職員に向かっては激しい口調で、学生を大事に、暴力は許さない、などと言いながら、実際の自身の言動は、それとは全く逆のことだった。これを欺瞞とは言わないか。憲法を大事にしよう、とも言った。今、憲法が戦後かつてない危機にあるとき、憲法擁護のために発言をしたか。公費助成が、今回特別転籍問題で25%・15億円削減された。相談役なら、当然にこれを自らの責任と思わないか。学生や父母に申し訳ないと思わないか。

### 「民主主義を考える会」への期待

私が退職して8年が過ぎたところで、この「民主主義を考える会」（元教職員）が旗揚げされたことを知った。ようやく信頼していた先生方が意思表示をされたか、と思った。

今回、立命館が立ち至った事態は、今の日本社会の政治的経済的混迷、行き詰まり状況とぴったり合っている。立命館がこの間、新自由主義の時流に乗り、政府の政策に沿って、あるいはその先取りをしながら経営優先の大学運営をゴリ押ししてきた当然の帰結と思う。

今後は、たとえば民主的な経営体論・組織論、理事者側と労働組合の関係、「合意形成」論、リーダー論、そして、企業社会にとりこまれてしまった大学の、本来のあり方というような問題について、現代社会が提起する問題の本質と切り結んだ（「情勢と切り結ぶ」とは、業協、全学協でよく言われたものだ）真剣な論議と研究がなされていく必要があるのではないかと考える。教職協同で。

## 立命館の民主化を願って！（辻村 寛・'01. 3退職 元理工学部教員）

\*ニュース No. 10 に掲載した辻村先生の「私の意見」の続きです。

### その2—教学優先は守られているか—

衣笠キャンパスに産業社会学部が移転したころ、私が所属していた電気工学科は旧四号館（現有心館）を基本棟としていた。1970年、産社の衣笠移転に伴って、学而館が建てられた。新装の学而館に対面する四号館のコンクリート吹きつけの外観はいかにも見劣りがしたのであろう、学内理事会はタイルの化粧貼り改装を決め予算化していた。学園紛争直後で、電気科としては従来からの卒業研究のありかたを大幅に変更するために学生指導のゼミ室兼卒研実験室を四室ほど確保する必要に迫られた。二階吹き抜けの高圧実験室を大改造して部屋を確保する案をまとめ、施設課と交渉に入ったが予算が無いと交渉は難航した。当時の西村幸雄理事に相当強硬に交渉して、結局、タイル貼り外装の工事を取りやめて電気科の要望がみとめられることになったのである。旧四号館の外装がタイル貼りになったのは、情報学科新設にともない洋館が新築され、電気科もそこに移転した1988年であった。現場の要求を重視して教学施設の改造がみとめられたのである。

現在、大学は衣笠とBKCの二つのキャンパスに別れ、法人の本部棟を朱雀キャンパスに置いている。一拠点時代と違って学園中枢部の要人とも気軽に会うことも難しい。逆に理事会も現場の状況を的確に捉えにくくなっているのではなからうか。

BKCに移転して大幅の大学院定員の拡大と光工学科の設置があり、新設の校舎の実験室が不足することになった。衣笠時代は50名単位で実験を行っていたのが80名を越えるクラスでの実験となり、院生をTAとして投入できるようになったものの専任の教員

は一人で非常勤教員とのチームを組んで指導に当たることになる。理事会はBKCの移転には相当の資金を要したのでこれ以上の出費は認められないとのことで実験室の増室は容易に認められなかった。類似した問題は低回生の基礎科目にも現れていた。従来は主要科目を小クラスに分けて行われていたものを一括して大教室で講義することになったのである。この選択は大学院の指導に力点をおかざるを得なくなったことにもあった。その結果、学部段階で十分な基礎を身につけていない学生も多く、院に入ってからそのぶん手が掛かるというジレンマに悩んでいた。現場の教学条件の改善が思うようには進まないのが実態であった。残念ながらこのような事例は他にも多くみられる。たまに昔の同僚にあうと会話のはしほしに不満が鬱積している様子が窺えるのである。

### その3—現場の意思統一が大切—

1979年度の学費値上げは、今日の立命館の発展を支える画期的なものされている。学園がここに来て初めて長期計画を立てる財政的裏付けを得ることになった。理工学部においては発足以来の学科編成は変わらず、80年代の技術革新が叫ばれるなかで、時代の要請に応える学部の刷新がおくれていた。衣笠では校地面積に制約され大幅な学科の増設は望むべくもない。せいぜい一学科の新設が精一杯とされただけに、理工学部既存の学科刷新にも寄与できるような分野が望ましいとされた。一方、1960年代に入って夜間の二部は母体層の著しい変化に伴い、一定レベルの学力を有する勤労者を確保することが著しく困難になってきたため、二部改革が全学

課題として取り組まれていた。理工学部の一部は一部と同じ五学科を持っていたが、これを整理して基礎工学科として一学科に統合する方向で改革案が模索されていた。その際、出来るだけ多くの学科が関われるようなカリキュラムが指向されていた。既存学科の利害を超えて熾烈な議論をかさね、ほぼ8年の試行錯誤の末、最終的には情報と材料の二コースを持つ案に収斂したのである。この経験は理工学部のその後の改革に無駄にはならなかった。1980年代には情報学科の新設が実現するが、理工学部教授会の合意が比較的短時間で纏まったのは、基礎工改革での取り組みが学科間の垣根を低くする上で大いに貢献したからであると思っている。

#### その4—BKC移転の取り組みから—

1989年9月、理工学部教授会にBKC移転が提起された。一般の教授会メンバーには全くの寝耳に水の話であったが当日の教授会でほぼ満場一致で議決された。理工学部としては情報工学科の新設はあったにしろ、多くの既存学科には直接のメリットは少なく、それぞれ学科刷新の課題を抱えつつも衣笠では校地面積との関係でどうにもならないという半ばあきらめにも似た逼塞感に見舞われていた。それだけにBKCにユートピアを感じたのである。大学院の大幅な拡大とその研究施設の充実を計るために、研究センター棟建設という具体的目標を定め、外部資金の獲得にむけた各学科の自主的な取り組みが展開されていった。特に、当時の意識としては、「授

業料は学生の教育に資する用途を主に考えざるを得ない。研究費は自主的に集める努力しかない。ただその場合大学の主体性だけは保持したい」このあたりの意識はまだ学園紛争の後遺症が各人に色濃く残っていたのである。リエゾンオフィスの設置、受託研究の窓口一本化などの巧みな誘導法に乗って、各学科は企業からの寄付金獲得に相当なエネルギーを注いだ。それと言うのも研究棟の配分が寄付金額の量によるという成果主義が持ち込まれたからである。基礎研究が主となる理論系の教員との間に研究費の格差が広がった点は気になったことである。しかし、学部を挙げての取り組みは、研究レベルを格段に引き上げたいとの願いが共通のものとしてあり、そのエネルギーが見事に結実したのである。およそ半年間にわたり、卒業生の多い企業を中心に手分けして寄付の呼びかけに奔走した。成功の鍵はどれだけ本気で自己の問題として意識して取り組めるかにあった。

#### おわりに

いたずらに昔は良かったとする老人の回顧談に受け取られるとしたら本意ではない。当時とは比べものにならない規模の拡大とそれを支える体制の変化の下で、今何が必要かについて過去のわだかまりを捨てて、全構成員自治の再構築が必要と思うからである。それかなければ今後予測される厳しい情勢を乗り切ることができないであろう。理事会には失礼だが「捨故走新」に写るのが退職者の目だけであれば幸いである。



ニュース発行に事欠かないくらい立命館の役員が関わる不祥事は続いています。不祥事の対応ばかりを業務にしているわけでない立命館の広報課は臨時増員が必要なくらい大変なようです。(深夜労働をさせても総務部長は平然としているのでしょうか?)

「考える会」事務局は退職者のペースで“ぼちぼち”と取り組みを進めてきましたが、それでは手が追いつかない今日この頃です。7月4日(土)読売新聞夕刊他に全国の私大関係者を驚愕させる事件がマスコミに取り上げられました。これに対し、さっそくメールが寄せられました



ので、次に紹介します。

### 【私もひとこと】

### 辞任勧告を！

(ある退職教員)

きょう7月5日の「毎日」と「しんぶん赤旗」に、またもや立命館の醜聞が。

「毎日」は「長田豊臣・財務担当理事(70)を交代させた」とだけだが、「赤旗」は「長田豊臣立命館理事長も財務担当理事から外し」と。

私大連盟の不適切な経理の一部が例示されているけれど、事務局局長も問題だが、「決済に關わった」長田氏に、私大連盟の社会的位置について、学生と教職員に対する責任の重大さについて、民主主義の思想と実践について、極めて腐朽した人物しか持たないような軽佻浮薄な認識しかないことが、露呈されたと思うのです。

立命館の民主主義の伝統は無残にも蹂躪された、その悔しさ、腹立たしさ。

長田氏は、コノこともあり、理事長を辞任すべきでしょう。私たちの会として、辞任勧告を出してはどうでしょう。

# 私大連盟 3300万円不適切

## 昨年度 政治パーティー、料亭

### 支出 不適切

#### 決裁の事務局局長解任

同連盟はこれを受け、4月15日午前から緊急常務理事会を開き、これらを決裁していた赤坂雄一・事務局(56)を解任したほか、財務担当理事を交代させた。

同省が不適切と判断した支出には、赤坂事務局局長の連盟の貸し付け制度を利用して、年利1%で借りた約2300万円が含まれていた。連盟の規定の貸し付け利率は、同省は「政治家からの返済が滞り、計2066万円の政治資金集めパーティーで計1033万円のパーティー券を購入していた。一件あたりの支出は2万2000円だった」と説明している。

このほか同連盟は昨年、計2066万円の政治資金集めパーティーで計1033万円のパーティー券を購入していた。一件あたりの支出は2万2000円だった。同省は「政治家からの返済が滞り、計2066万円の政治資金集めパーティーで計1033万円のパーティー券を購入していた。一件あたりの支出は2万2000円だった」と説明している。

#### 私大連盟が不適切支出

07年度 政治パーティー券代など3300万円

文部科学省所管の社団法人「日本私立大学連盟」(会長・安西祐一郎)が昨年1年間に、政治家のパーティー券の購入費約1000万円を含め、高級料亭での「役員懇談会」やスナックでの「打ち合わせ」の費用などに総額約3300万円を使っていたことが同省の調査でわかった。連盟の事業活動費の1割弱にあたる支出で、同省では「私立大の振興を図るという公益法人の目的を逸脱しており、不適切」と判断、事務局組織の見直しなど11項目の改善事項を示して行政指導を行った。

#### 私大連盟が不適切支出

07年度 政治パーティー券代など3300万円

文部科学省は4日までに、同連盟の改善を求めた。同連盟は「社会通念に照らして高額の、公益法人の事業とは見なせない」と判断した。私大連盟は同日の常務理事会で、会計処理した事務局局長(56)を解任した。決裁にかかわった長田豊臣立命館理事長も財務担当理事から外し、業務改善委員会の設置を決めた。

#### 私大連盟 不正支出

文科省、パーティー券1000万円購入

文部科学省所管の社団法人「日本私立大学連盟」(会長・安西祐一郎)が昨年1年間に、政治家のパーティー券の購入費約1000万円を含め、高級料亭での「役員懇談会」やスナックでの「打ち合わせ」の費用などに総額約3300万円を使っていたことが同省の調査でわかった。連盟の事業活動費の1割弱にあたる支出で、同省では「私立大の振興を図るという公益法人の目的を逸脱しており、不適切」と判断、事務局組織の見直しなど11項目の改善事項を示して行政指導を行った。

なげけるか いかれるか はた もだせるか きけ はてしなき わだつみの声

上記文は、太平洋戦争でペンを銃にかえ、戦場に散っていった全国の戦没学生の怒りと悲しみと苦悩の象徴としての「わだつみ像」台座に刻まれています。(本学国際平和ミュージアムに設置)

今、学園の現状を捉えた時、立命館関係者の心情を広く包括するような響きをも持って聴こえてきます。“はてしなき わだつみの声”にも似た学生・教職員・国民の声は学生大会決議、教授団決議、職場決議、ネットワークとなって広がっています。

わだつみ像は本学の教学理念である「平和と民主主義」をも象徴するものです。「平和」と「民主主義」は切っても切れない密接な関係を持っています。ここ数年来の立命館をめぐる事態は、「民主主義」をないがしろにした学園のトップたちによる専断的運営から、学内の「平和」が乱れてきたのです。学園の現状を憂い「平和」を願う教職員は、まず心通わす者同士から「国民のための学園はどうあるべきか」語りあうことが大切です。座して平穩を待つても、平穩は訪れないでしょう。

「平和」を取り戻そうとしたら、その最大の原因＝専断的運営を改めようとならない学園トップたちを退陣に追い詰めない限り、要求実現も教育・研究・業務に専念できる「平和」はおとずれないでしょう。常務会・学園トップは教職員、学生、院生の意見を尊重せず、果ては、学友会・自治会の決算の不十分さや立命の分担金の多さなどを口実に上部団体は役割を果たしていないと評価、自分たちの言いなりになる「御用自治会」を意図し、補助金等予算措置と引き換えに自治会費の代理徴収を辞める方針を打ち出しました。新しい火種を蒔いたのです。そのような方針を提起した人たちは、今何が本当にされなければいけないかを、全く分かっていないようです。

親しい教員から「会」にメールを頂きました。その内容は先日の臨時部課長会議での川口総長・長田理事長の「特別転籍」問題の発言を「ゆにおん」等で見聞したものでした。ここに紹介します。

「むかし法哲学の講義で、『法律とは最低限の道德・倫理を規定したものであり、想定外のことは文言では規定できないが、法律の趣旨である道德・倫理に照らして行為の是非を判断すべきである』と聞きました。

料理屋としては「他人の食べ残しを使い回すこと」はあるまじきことであり、このような行為は、食品衛生法ですら想定外のことですから、禁止規定の文言ありませんが、さりとして「法律の規定に違反していない」から許される行為ではないはずです。川口・長田二人の発言を聞いて、船場吉兆と同じレベルだと思いました。

『この公園で立ち小便を禁ずる』という法律のもとで、『中腰で小便をしたのだから法律違反ではない』と言い張るのと同じレベルです。なさけない限りです。彼らは何が社会的に批判されているのか、いまだに分かっていないのです。」

学園のトップがトップなら、直属の部次長も部次長です。組合ニュースゆにおん No.59 で指摘した評議員選挙で新人職員に特定候補の投票を誘導する行為は、「考える会」ニュース No.9 の編集後記の指摘を絵に描いたような出来事ではありませんか。以下ここに編集後記の一部を再録します。

「上<sup>じょうりょうただ</sup> 梁<sup>かりょうゆが</sup> 正<sup>はり</sup>しからざれば下<sup>はり</sup>梁<sup>ゆが</sup>歪<sup>はり</sup>む」という諺がある。これは字の通り、上の梁がまっすぐでないと下の梁が歪むの意味で、上に立つ指導者が良くないと、それにつれて下の者が墮落することの喩えである。・・・以下、省略（引用：‘07. 10. 7 京都新聞 井波の一日一言より）

上記の諺は、対応を誤れば立命館とて例外にはしてくれないでしょう。“船場吉兆”の対応を他山の石とせず、国民と学生・父母の利益を守る立場で、事態の解決と誇りが持てる学園づくりにむけて教職員の声をあげることが大切になっていると思います。 (M&H)

## ※ 定期雑誌：『ねっとわーく京都8月号』に地デジ・同和・立命館特集

—わかっているようでよく分からない3題晰—

- 特** ①京都市で「地デジ難民」を発生させるな！  
②「すべて市を助けるためにやったこと」——解放同盟支部長の言い分  
③立命館大学は特別転籍問題で何を謝罪したのか
- 集** ④立命館に何が起きているのか、立命館の民主主義は変容してしまったのか？

\*「ねっとわーく京都」では、市民・府民の疑問に答えるための特集を検討するそうです。その一環として、引き続き立命館大学教職員組合や「立命館の民主主義を考える会」への取材、インタビューなどを通して適宜「立命館」特集を企画していくそうです。退職教職員の皆さん、現教職員の皆さん「ねっとわーく京都」を注目していきましょう。毎月発行：定価500円です。定期購読希望者は、発売元の「かもがわ出版」・電話番号：075（432）2868に申込み下さい。

### 《訂正》

\*ニュース No.10号の6ページ・右側8行目：雪印乳牛（誤）⇒雪印牛乳（正）  
同7ページ：6月23日の転籍問題の謝罪会見の写真説明—（\*注：3人目は中村副総長です）は、「中村教学担当常務理事」の間違いです。訂正しお詫びします。（このところ総長を補佐すべき肥塚副総長が姿を見せないのも思い違いし、失礼しました。）

### 賛同者(50音順)

[2008年7月7日現在]

朝日 稔、芦田 文夫、**荒井 正治**、荒川 重勝、安藤 哲生、井川 定雄、石田 昌幸、石飛 幸子、伊藤 堅二、伊藤 武夫、**伊藤 澄子**、井上 純一、岩井 忠熊、梅田 四郎、岡尾 恵市、奥地 正、奥村 功、小野 一郎、恩田 良昭、笥 文生、香積 学、加藤 直樹、**苅屋 公明**、川上 勉、菊井 禮次、栗山 崇、桑原 博昭、小檜山 政克、小村 英一、**近藤 英城**、坂田 典子、坂野 光俊、阪本 欣三郎、佐々木嬉代三、佐藤 嘉一、杉野 圀明、**島貫 志津江**、須田 稔、園田 充則、**代田純**、高内 俊一、高木 彰、高橋 悠、田坂 和美、田中 宏道、辻村 寛、津田 孝司、堤 矩之、戸木田 嘉久、友藤 信明、**中谷 猛**、**中谷 義和**、中村 泰行、中山 康之、永原 誠、夏原 嘉弘、浪江 巖、廣末 良子、藤原 莊介、二場 邦彦、松田 全功、南 直樹、**三木 照雄**、宮澤 正男、**三代澤 経人**、三好 正巳、森野 勝好、山口 幸二、**山崎 信三**、山下 弘、山辺 昌彦、山本 岩夫、(故**山田潤子**)、角 正子、若井 勉、和田 武

※太字は、第2回フォーラム以降に賛同者になられた方です。 賛同者合計数：101名（匿名24名含む）

事務局連絡先：

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 立命館大学教職員組合 気付

「立命館の民主主義を考える会（元教職員）」

TEL:075-465-8200（宮澤気付） FAX:075-465-8201

メールアドレス [rits.democracy@gmail.com](mailto:rits.democracy@gmail.com)

ホームページ <http://rits-democracy.blogspot.com/>